

県史談会 平成29年3月12日(日) 史跡めぐり

座間市内の「県下名勝史跡45佳選記念碑」 北向庚申堂・龍源院弁財天・座間神社を中心に

【担当】 荻田 豊

【見学箇所と参考資料など】

1. 北向庚申神社 第15位 109,722票 栗原中央1丁目

祭神は猿田彦命・青面金剛・帝釈天。上栗原の守護神。甲州から移り住んだ住民が村外れに建てた庚申塔が神体。昭和10年(1935)、地域の人や信者の願いが実って現在の社殿が造営された。

西側に古い道標がある。

向 右 上栗原ヲ過テ 大塚 深谷 長後方面ニ至ル

左 小池ヲ過テ 座間駅 新磯 上溝方面ニ至ル

向 右 上栗原ヲ過テ 座間 国分 厚木方面ニ至ル

左 南林間ヲ過テ 鶴間 瀬谷 長津田方面ニ至ル

2. 目久尻川

相模原市南区相武台団地付近を水源とし、寒川町で相模川に注ぐ相模川水系の一級河川。19.2km。名の由来は、座間市栗原にあった寒川神社の「御厨」の辺りから流れてくるために下流で「御厨尻川」と呼び、それが転じたという説、また海老名にこの川に住む河童が悪さをしたのでこれを捕えて目を穿り(くじり=抉り)取ってしまったことから「目穿川」と呼ばれ、それが転じたとの伝承がある。

3. 栗原山崇福寺(臨済宗建長寺派) 栗原中央1丁目

本尊は釈迦如来。戦国時代甲斐の国からこの地に移り住んだ甲子太郎右衛門が開基と伝わる。昭和53年(1978)に建長寺管長湊素堂師を招き開山450年祭が開かれた。山門右脇に愛児を抱いた母親の姿をかたどった「子育て地蔵」があり、北側100mくらい先の崖に横穴墓がある。

4. 上栗原石造物群 緑ヶ丘1丁目

嘉兵衛坂下の星の谷街道と栗原縦貫道の分岐点に4基の異なる石造物がある。左から、

六字名号碑＝天保4年(1833)建立

道祖神塔＝碑形：隅角丸角柱形 形態：文字塔・有縁

安政4年(1857)1月「衛(ドウ)」の字を使った道祖神塔は全国的にも珍しく、市内唯一。

秋葉山供養塔＝文政12年(1829)建立 常夜燈型 道標を兼ねる。

出羽三山供養塔＝建立年代不明 湯殿山・月山・羽黒山の供養塔で、山岳信仰の信者が建立したものと思われる。

5. 嘉兵衛坂道標

星の谷街道の坂の一つ。坂の下に嘉兵衛さんという人が住んでいた。

6. 三峰台の庚申塔 入谷3丁目

唐破風付角柱形 青面金剛像 三猿像付 道標を兼ねる。明和5年(1768)4月吉日建立。昭和30年代初めまで大きな榎があり「榎庚申」と呼ばれた。正面の青面金剛像は憤怒の形相が良く表現され、市内で最も整った金剛像と評価されている。旧星の谷・巡礼街道の三峰神社参拝口の重要な要路に建てられいたので榎と共に旅人の目印であり、よい憩いの場所でもあった。

7. 三峰神社 県立座間谷戸山公園内

秩父三峰神社の神体山は妙法山・白岩山・雲取山で、その末社。火難・盗難除けの神様とされている。

8. 星の谷の庚申塔 入谷3丁目

碑形：山状角柱形 形態：文字塔・道標を兼ねる。年代：明治8年(1875)2月吉日 幕末から明治にかけての典型的な文字塔。星の谷・巡礼街道と府中街道その分岐点に建立されており、道標の中に東京や横浜の地名が刻まれ、明治初めの時代の変化の息吹を感じる。

9. 妙法山星谷寺(真言宗大覚寺派) 入谷3丁目

本尊は聖観世音菩薩。坂東8番札所。寺の由緒によると約1200年程前、聖武天皇の時代に高僧行基が諸国教化のうちにこの地に逗留し、

自ら聖観世音の像を刻んで堂宇に安置したのが寺の起こりと云う。また過去帳では長元9年(1036)当院開基法印善宥没とあり、これは平安時代中期にあたる。市内で一番古い歴史をもつ寺で、寺伝によれば、昔北方の本堂山にあったが、火災で現在地に移る。境内の嘉禄三年紀梵鐘(国指定重要文化財)は、全国で50番目、関東以北では2番目に古く、近江源氏の佐々木信綱が寄進したもの。ほかに北条氏制札・北条氏照寄進状・豊臣秀吉制札・宝篋印塔・咲き分け散り椿が市指定重要文化財。

★宝篋印塔 建立年代：宝暦13年(1763) 関東大震災倒壊後復元

銘文中に「鎌倉郡座間郷」とあるのは星谷寺にかかわる石造物に類例が見られもので江戸時代初期の幕府への寺領報告の中でなされたものがそのまま継承されたものではないかと考えられる。

10. 座間山心岩寺(臨済宗) 入谷1丁目

本尊は釈迦如来(市指定重要文化財)。元は河原宿にあり、真言宗久光山心願寺と称す。文安年間(1444～8)に相模川の洪水で流失し、文明2年(1470)地頭職であった白井織部是房がこの地に再建、宗派を改め、山号を変える。本堂北側の不動尊を祀った「不動池」は豊富な湧水を利用。坂上の墓地に小田原攻めの際、豊臣方に参加し帰途この地で急逝した磐城国(福島県)平城主岩城常隆の供養のために建てられた五輪塔(市指定重要文化財)がある。

★岩城常隆供養五輪塔 建立年代：寛文9年(1669)

または享保14年(1729)

本塔は昭和29年に発見され、その際かろうじて読みとれた「己酉(つちのととり)」より、建立年代が推定され、「前四品貫主松巖院殿最翁大居士」により、岩城常隆の供養塔と判明。岩城常隆は福島県の常盤(ときわ・現いわき市内)周辺を治めた豪族。当時常盤周辺では伊達正宗他の戦国大名が領地争いを繰り広げていた。こうした中、常隆は豊臣秀吉の小田原攻めに際して出兵を申し出て許され、小田原に参陣したが、帰途の6月24日に星の谷の里で急病のために24歳で没したと伝えられ、この塔は後世供養のために建立された。

11. 鈴鹿明神社（旧郷社） 入谷 1 丁目

入谷地区の氏神。祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命ほか。社伝によると、欽明天皇の時代（531～71）に三重県鈴鹿神社の神輿が海上を渡御していたおり、にわか嵐に遭い流されて、当時、入海だったこの地に漂着したものを里人が鎮守と崇め祀ったと伝えられる。本殿下に縄文後期の平地式住居跡鈴鹿遺跡（市指定重要文化財）がある。

12. 水上山龍源院（曹洞宗） 入谷 1 丁目

本尊は釈迦牟尼仏。開基は桜田伝説に出てくる渋谷高間。天保年間（1830～43）には寺子屋が開かれ、明治6年（1873）座間小学校の前身「風牛学舎」が、座間入谷・座間・新田宿・四ッ谷の4ヶ村の協力により開設。庫裡の裏手に蛇身の上に女神の首が乗った一風変わった弁財天がある。これが、45佳選第42位、投票数36,578の龍源院弁財天。記念碑は新しくなった本堂前にある。

13. 閻魔堂 入谷 1 丁目

龍源院参道入口鈴鹿長宿自治会館の敷地内にあつて、「十王」のほか2体の仏像が合せ祀られている。『新編相模国風土記稿』には「十王堂龍源院持」とあり、会館の敷地も東西・南北ともに『皇国地誌残稿』に載る長さとはほぼ一致し、当時からこの地にあつたものと推測される。

14. 鈴鹿・長宿湧水の里 入谷 1 丁目

この地域は、樹木が繁茂している相模川左岸河岸段丘が南北に続き、崖下から湧水が出ている。南から心岩寺湧水、龍源院湧水、鈴鹿の泉、番神水と続き、いずれも重要な生活用水として利用され、相模川左岸用水ができるまで、水田の灌漑用水だった。崖の上下に縄文時代の遺跡などが発見されている。

15. 休息山遠光院円教寺（日蓮宗） 入谷 1 丁目

本尊は久遠実成本師釈迦牟尼仏。開基は鈴木弥太郎貞勝。日蓮上人が文永8年（1271）竜の口の法難を免れ、依知の本間重連邸に護送される途中、刀鍛冶の鈴木家に休息された折、上人から「円教坊」の法号を受け、深く帰依して寺を建立。「紺紙金泥法華経1巻」と「佐々木

掛 鐙1双」が市指定重要文化財。

16. 番神水公園 入谷1丁目

日蓮上人が竜の口法難の後、鈴木家に立ち寄り休息された折、刀鍛冶の鈴木弥太郎が刀を鍛えるため良い水が欲しいと申ししたところ、傍らの石に南無妙法蓮華経と題目を書き記し、法華経を唱えながらこの地をうがつと、清水がこんこんと湧き出した。これが番神水といわれる。

17. 平和の小径と平和坂 座間1丁目

番神水公園から平和坂に通じる小径、右側崖面に丸い小石の層が見られ、対岸の厚木側との間を時により流れを変えていた相模川の様子が想像できる。平和坂下の所は古くは何本かの道が合流していたところから、「六道坂」と呼ばれていたが、大正11年(1922)の平和記念東京博覧会開催を記念して「平和坂」となる。江戸時代は「鮎かつぎ」や旅人が府中街道や江戸街道を通って町田や江戸に行く道だった。

18. 法華塚 座間1丁目

平和坂下の小高い所に日蓮上人立像と共にある。この塚は陸軍士官学校用地拡張により、それまで「相模原隧道」の上方にあった2基を合祀し再建したもの。もとは、円教寺の開山日範上人が当地に入寺の記念として、報恩感謝の意を込めて、一つ一つの小石に法華経の一字ずつを書いて埋めたと云われる塚と、これに倣って造られた円教坊の塚との2基があったと伝えられる。

19. 座間神社(旧村社) 座間1丁目

座間地区の氏神。欽明天皇(531~571年)頃、地域に疫病がはやった際に飯綱権現の化身が現れ、山裾から湧き出る清水を使うと良いとお告げに従い、湧き出る清水を飲んだところ病気が治ったので飯綱権現を祀ったのが本社の起こりと伝わる。明治9年(1876)飯綱権現から座間神社と改称される。境内に明王社・浅間社・天神社・山王社・道祖神・蚕神社の六社が合祀されている。45佳選第40位、37,816票獲得の記念碑は参道入口左看板裏にある。

20. 来迎山峯月院宗仲寺(浄土宗) 座間1丁目

本尊は阿弥陀如来。慶長8年(1603)、この地方の領主、内藤清成が実父竹田宗仲のために創建した寺院で、開山は源栄上人。源栄上人は徳川家康の知遇を受けた僧である。家康が生前相模国での鷹狩りの際や府中御殿に行く時などに休息したとされ、さらに、家康の遺骸を駿府久能山から日光に移送する際にも行列が当寺に立ち寄り休息している。六字名号碑1基と蜻蛉灯籠1基が市指定重要文化財。他に徳川家康拝領の茶器7点を寺宝として保存。

★六字名号碑 建立年代：元和4年(1618)

中世には各地に「板碑」と呼ばれる細長い石の板で作った供養塔建てられた。一方庶民の墓標は現在も見られる木製の塔婆が立てられることが多かったが、関東地方などでは徐々に板碑を模した石造の墓標が個人の供養塔として作られるようになった。この六字名号碑には、これら中世と近世の特徴が共存している。名号の下に連座が彫られ、幅や厚さに比べ高さが高いのが板碑の形式の名残りだが、板碑のプロポーションに比べるとはるかに厚みがあり、江戸時代中期の墓碑の近づいている様子が伺える。碑の頂部が屋根型なのは板碑と塔婆の形式が混合しているものとみられる。作風も堂々としていて、年号が明らかな市内の石造物の中で最古のものである。

★蜻蛉灯籠 製作年代：江戸時代初期？(1600年代前半)

台座は後世に造られたものと推定されるが、他の部分は旧来の形をとどめている。火袋には対称の二面に窓が開けられ、その一窓の両側にそれぞれ径10センチの日と月の像が刻まれ、残り二面は不明。また心柱にある銘文も判読困難。